

■ばふばふするだけだったのに

魔物から世界を救う旅をしている女闘士マルティナ。今は魔物に占拠されていた町に来ていた。
既に魔物はマルティナが追い払い、この町も以前のように平和で活気に満ちた姿を取り戻しつつあった。
しかしマルティナには休まる暇などない。他にも救済を求めている人々が存在し、彼らを助けるために再び旅立たなければならない。準備のため、町の中で買い物をしていると……人目の届きにくい裏路地で、少年が一人ポツリと立っているのが見えた。

(迷子かしら？ それとも……)

魔物からの被害は比較的小さく済ませられたが、中には戦災孤児となってしまった者もいるかもしれない。心配したマルティナは近付き、少し前屈みになることで少年と視線を合わせ、優しく微笑んだ。

「坊や、こんなところに一人でどうしたの？ 迷子？」

【ううっ……その……うう……】

「どうかしたの？」

声をかけた途端、泣きそうな声と共に俯いてしまう。つられてマルティナも更に屈み、少年が不安にならないように声を潜めて続ける。

「つらいことがあったかもしれないけど……もう大丈夫よ。だから泣かないで」

【その……あのお……】

「悩みがあるなら、お姉さんに何でも言ってごらんなさい」

【いいの？ じゃあ ばふばふさせてー♪】

もみっ♥

「……えっ?!」

急転した少年の表情と声色。いかにも不運を背負っているといった影が一切なくなり、軽快な笑みと共に顔を上げるや、少年の口から出たとは思えない言葉をかけられる。

そして同時、少年の手はマルティナの胸に伸びていた。急な動きな上、視線を合わせるために屈んでいたマルティナはこれを避けられず、胸部……大きく発育した両の乳房を、掌によって驚掴みにされる。

悪い予想からはあまりにかけ離れた、非常識にもほどがある状況に、思考が停止。驚愕で裏返った声が出てしまう。

しかし数秒後……少年によって胸の感触を愉しまれていることに気付き……一連の流れが少年の悪戯であることを把握して、彼をあやそうとしていた手を握り締めた。

コツンッ！

【いたっ！】

「なにをしているの、全く！ あ、もしかしてキミね、ばふばふ小僧っていうセクハラ坊やは?!」

【えー？ 知ってて話しかけたんじゃないのー？】

「そんなわけないでしょう！ はぁ……心配して損したわ」

噓泣きしたかと思いきや、いきなりばふばふを要求しつつのセクハラ。少年の行動に、マルティナは噂で聞いた『ばふばふ小僧』のことを思い出す。

なんでも、あの手この手で美人を騙し、セクハラをしたりばふばふを強要する少年がいるらしい。女性たちには、ばふばふ小僧と呼ばれ嫌われているセクハラ坊やだが……それがこの少年であるとマルティナは確信する。

「あのねえ……こんなイタズラしたって、なんのためにもならないわ。人の迷惑になるようなことはやめなさい」

【そう言わないでさー。これでもオトコだからおっぱい欲しいんだって。ねーばふばふしてよ】

「知らないわよ、そんなの！」

【怒らないでよ。女の人だっておっぱい触られて気持ち良いでしょ？ ばふばふさせてよー】

「キミねえ、えっちな本の読みすぎよ」

【えっちな本知ってるんだ！ やっぱ女の人でもドスケベなんだ！ じゃあばふばふさせてくれてもいいじゃん！】

「いや、そういう意味じゃなくて……」

【見た目もめちゃくちゃ美人、ていうか超エロいし。やったことあるんでしょ？ ねーばふばふー】

（な、なんなの、この子……）

一度火が付くと異様に捲し立ててくる。まだ若いというのに、町の女性たちの噂になるのも納得のしつこさだ。ばふばふばふと、あまりにしつこく要求してくる。当然ながら、こんな非常識な要求には嫌気がさすが……

（この子……見た目は悪くないのよね……）

悔しいが、あどけなさの残る容姿は母性本能をくすぐるものがあり、なかなかマルティナ好みのものだ。発言内容とは真逆な澄み切った瞳で見つめられると、つい甘やかしたくなってしまう。

とはいえ、見た目が好みだからといって淫らな行いを許すわけにはいかない。丁重に、しっかり断ろうとするが……

「……私、急いでるの。じゃあね」

【ちょっと待ってよ、ほら、ばふばふ用のお金はあるからさー】

「あのねえ、あんまりしつこいなら役所に……っ？！」

少年が取り出した札束。それはばふばふの料金としては破格な、これまた非常識な大金であった。旅を続けるマルティナにとって、金銭のやりくりは避けられない問題である。もし本当にこれだけの額がもらえるというのなら、ばふばふの一つくらいは安いものかもしれない。

一瞬心が揺らいた隙に、少年があざとく付け込んでくる。

【ほら、前金にこれあげるからさー】

「いや、待ちなさいって……こんな大金、逆に怪しいし……」

【ね？ ちょっとだけでいいから！】

強引に渡され、更に動揺。はつきり断れなくなり、ここぞとばかりに押し切ってくる。

【どうしても！ おねがい！ 一回だけ！ ほんの少し！ 一瞬でいいから！ ね？】

「その、だから……………」

（お金は、欲しいけど…………なくても…………いえ、魔物を倒す旅だもの。できるだけ不安要素はなくしたいし…………胸が少し触れられるくらいなら…………でもこの子、ぱふぱふだけって言うけど、それ以上のことされたら…………流石に精通してるでしょうし、万が一襲われて、取り返しのつかないことになったら…………まあ、いつでも蹴り倒すことはできる、けど…………でも…………）

現在、手持ちは少々厳しい状態。それもあり、少し迷った後……

「…………ぱふぱふ…………だけって、約束できる…………？」

【！ うん！ 約束するから！】

ぱふぱふだけなら、まだギリギリ許容範囲。これからの旅を考え、渋々にぱふぱふを了承することにした。

【やったー！ こんな美人にぱふぱふしてもらえるなんて！ 一生の自慢だー！】

「言っておくけど、他の誰かに言うのもダメよ？ 約束よ、少しの間、ぱふぱふ するだけだからね…………！」

念入りに言い付けて約束させると、淫行をするために少年の部屋へと案内される……

◆

案内された一人用の狭い部屋。ベッドが敷かれて更に狭く感じる中、二人は向かい合う。

【マルティナさん、だっけ？ よろしくねー♪】

「はい、よろしくね。じゃ…………いくわよ」

【あ、ちょっと待って】

ぱふぱふ…………相手の頭を、自分の胸で挟む行為をしようとするが、そこで少年からストップがかかる。

【せっかくだし、おっぱい見せてほしいんだけど…………】

「え？ それはダメよ！」

【えー？ お金出すからさー！】

少年はマルティナの胸…………メロンのように大きく実った爆乳を眺めながら、一つ注文を足す。

どうも少年はマルティナの胸を生で見たいようだ。しかし当然これは断る。

ぱふぱふだけ、というのが約束だったはずだ。ここで譲歩してしまえば、この後もずるずると要求を足されてしまいかねない。

だが少年も引き下がらず、追加料金を出すから、としつこく懇願。

【どうしても！ ね？】

「……一枚だけなら、いいわ」

【え、一枚？】

「嫌なら帰るわ。そのお金を使ってお店で愉しんできなさい」

【う……わかったよ。じゃあ一枚だけで】

素肌を晒さないなら、まだ許容範囲。早く済ませたいというのもあり、上着一枚を脱いでインナー姿になることで手を打った。

妥協案に少年は渋っていたが……柔らかな生地が肌にフィットすることで、胸の形をくっきりと浮き立たせるインナー状態。それも悪くないと思ったのか、眼を輝かせて凝視してくる。

【……うん！ これもいいね！】

「そう……」

(なにが いいのか、全然わからないけど……)

胸に執着する少年の精神はマルティナには全く理解できない。呆れながら、今度こそ行為を開始する。

「もういいかしら？ じゃ……するわね……」

羞恥心を抑え、少年の頭を抱え……意を決し、自分の胸に引き込んだ。

たぶんっ♥

【うはっ♪】

着衣状態とはいえ隔てるのは薄い布一枚のみ。好みの顔をした少年ではあるが、男の顔が胸に触れる……鼻息がかかるところか、実質密着している状態に、やはり緊張と羞恥で朱くなってしまう。

(少しよ……少しだけ、我慢すれば……)

【あー、いいねこれ♪ 顔突っ込むだけでも気持ち良いよ。マルティナさんに頼んでホントよかったぁ……♪】

幸せそうにして評価されるが、軽度とはいえ売春行為の際に褒められても嬉しさは皆無。むしろ自分が女であることを思い知らされ、羞恥や屈辱の感情を煽られてしまう。

【インナー越しおっぱい……いい……♪】

頬ずりしてインナー越しの肌の量感を愉しまれる。牝を前にした雄の欲求が剥き出しにされ、マルティナは醒めるどころか嫌悪感に駆られてしまう。

(うう、やっぱりやるんじゃないかったかも……。そろそろ、いいかしら……?)

「……はい、終わりよ」

【え？ もう？】

時間にして一分程度。マルティナとしては充分だと判断し、少年の頭を突き放す。

これに対し少年は抗議。またワガママかと思いきや、どうも今の行為はぱふぱふではなかったという。

「え……ああやるんじゃないの？」

【もっとこう……おっぱいで左右から挟む感じにしてくれないと、ぱふぱふじゃないんだよ！】

「うう……わかったわ、やるわよ……」

熱弁され、左右から圧迫することによる『ぱふぱふ感』が重要なのだと教えられる。

半信半疑だが、これをやり遂げるまで少年は納得しそうにない。仕方なく胸奉仕を再開させる。

「……はい、どうぞ」

ぽふんっ♥

【えへへ……♪】

まただらしのない顔になり、感触を愉しむ少年。悦びようからして、このままでもいいような気がするが……マルティナは渋々、胸の左右に手を添え、少年の頭を包むように圧迫する。

【！　そうそう、それだよそれ♪】

「そ、そう……」

今度は納得してくれたようだ。ただ、すぐ終わらせてはまた文句を言われてしまうだろう。そう思い、更に胸圧迫を続ける。

ぷるんっ♥ たぶんっ♥

【うはっ、これ最高！　おっきくてやわらかくて、しっかり弾力と重量感もあって……まさにこれぞ、ぱふぱふって感じだよ♪】

「そう。気に入ってくれてよかったわ……」

妙に経験を感じさせる言葉を並べて興奮する少年。対し、マルティナは羞恥で朱くなりつつも冷めた声で返す。

たぶんっ♥　ぷにゅんっ♥

「……そろそろ……」

【あ、大事なことを忘れてた。ちゃんと『ぱふぱふ』って言わないと】

「えっ？　そんなことまで？」

……曰く、単に感触だけでなく、ぱふぱふ娘は言葉でもサービスするようだ。胸を自分から押し付けるだけでも恥ずかしいというのに、更に奉仕……しかも間抜けとしか思えない単語を言わなければならないというのか。

抵抗感で踏み切れないマルティナだが……このままでは許してくれないだろう。大金と引き替えだからこれぐらいは、と自分に言い聞かせ、慣れないながらも言ってみる。

「ぱ……ぱふ、ぱふ……」

【そうそう。そんな感じで♪】

やっと本格的なぱふぱふが愉しめるとなり、満足げな少年。彼を本当に満足させるため、仕方なく間抜けで淫猥な単語を連呼する。

「ぱふ、ぱふ……ぱふ、ぱふ……」

【いいよ～～……できれば、もっと甘える感じで……】

(……っ！)

「ぱふ、ぱふ♥ ぱふ、ぱふ♥」

たふんっ♥ ぶるうんっ♥

【はああ～～……これだよこれ……♪】

(ぱふぱふ娘って、こんなことしてたのね……)

実際にやってみて分かる、売春娘たちの苦勞。彼女たちはこれをもっと低価格で行っているのだから、その心境は察するに余りある。

世の女性たちの氣苦勞に思いを馳せながら、もう少しだけ胸奉仕を続けていく。

「ぱふ、ぱふ♥ ぱふ、ぱふ……」

【えへへ……ああ、気持ち良い～～……】

「……ねえ、もうそろそろいいかしら？」

【う～ん、もうちょっと……】

「……………」

言葉も使ったの奉仕が数分経過した。そろそろ終わってもいい頃だと思うが、まだ少年は満足し切っていないようだ。止むを得ず、更に続けていく。

「……ぱふ、ぱふ……………ねえ、そろそろいいでしょう？」

【もう少しだけ……あとちょっとだけだから……】

(まだ飽きないの？)

更に十数分経ち、それでも続行を望む少年。『あと少し』を繰り返され、流石に限度を超えていると思ったマルティナは優しい声を止めて声を荒げさせる。

「いい加減にして！ 少しだけって約束だったでしょう？」

【う～ん、でもさあ。何ていうか……真のぱふぱふには程遠いつていうか】

「なによ、真のぱふぱふって……」

【知りたい？ 仕方ないなあ……こうやるんだよっ！】

がばっ♥ もみいっ♥

「きゃっ?! ちょ、ちょっと……！」

ふざけた言葉にマルティナが疑問を抱いた瞬間、少年が両手を爆乳に食い込ませた。頭をうずめ、左右の掌でがっしりと乳房を驚掴むことで、顔と手全体で胸の感触を味わってくる。

【これこれ！　これが真のばふばふなんだよね～♪】

「ちょっ……やめなさいっ！　なにしてるのっ！」

真の奉仕を教える、という体でセクハラを働く少年。だが、いくらなんでもこれは完全に逸脱した行為だというのはマルティナにも分かる。

約束を反故にされ、叱り飛ばす。それでも少年は胸から離れないため、最後の手段として力尽くで引き剥がそうとした、その時。

「キミっ……いい加減にっ！」

もみいっ♥

「あっ……♥」

少年が高速で胸を揉みしだき、加減を心得た細かな刺激が送られる。それが効いてきたというのか、胸に快感が奔ったことでマルティナは力が抜けてしまう。

（な、なに、今のっ？　まさか、こんな子に揉まれて気持ち良くなんて……）

【あれ、変な声が出たよ？　真のばふばふ、マルティナさんも気持ち良いんだね！】

「っ……！」

都合のいいことを述べる少年。当然、マルティナは受け入れられない。

単に慣れない刺激に戸惑っただけだろう。そう思い。再び手に力を入れて少年の頭を抱え……

もみっ♥　ぎゅむうっ♥

「気持ち良いなんてあるはずないでしょ、離れなさ、い……っ♥　あぁっ♥」

（そ、そんな……！　胸が、揉まれただけで……気持ち良く……っ♥）

気のせいではない。少年の胸愛撫……それが、急激に胸の性感を高めているのだ。

見かけに寄らず絶妙な加減で胸全体を按摩する少年の手付き。みるみる内に胸が熱くなり、蕩けた声を奏でてしまう。

認めたくないが……この短時間で、少年が実は相当なテクニシャンだということを思い知らされる。ゆえに判断する。これ以上はまずい……早く離れなければ、何をされるか分からない。

一切休まず巧みに左右の手で胸を責めつつ、押し付けられる少年の顔。それを掴み、膂力で強引に離すことを試みる。

「約束よ……！　その手を止めて、大人しく離れ……」

もみっ♥

「あっ♥」

ぎゅむ♥　ぶるんっ♥

「あ♥　こら……っ♥」

【気持ち良いんでしょ？　遠慮しなくていいよ、みっちり教えてあげるからさ】

「違うわよ！　んっ♥　やめ……♥　調子に、乗らないで……あ……っ♥」



何度突き飛ばそうとしても、揉まれる度に酷く脱力してしまう。鍛え上げたはずの筋力が発揮できず、小さな少年一人のセクハラにさえ対抗できない。

脚を使って蹴り飛ばそうかとも思ったが、腰がわなわなと震えているため、蹴りも力が入らないだろう。生半可な踏ん張りで脚を上げれば、それこそ押し倒されて更に好き放題されてしまう恐れがある。

(蹴りは……ダメ♥ 脚も、震えて……♥ 力が……あ♥♥)

くりっ♥

「あああっ♥♥」

【乳首弱いんだね♪】

くりっ♥ ぴんっ♥

「違うから……んっ♥ や、やめなさい♥ 約束……ばふばふ、だけって……っはああっ♥♥」

【だから、これが真のばふばふだって♪】

乳首を摘ままれては弾かれ、火が付いたように熱くなる。

乳首は少々敏感だと思ってはいたが、ここまで感度が高いはずはない。やはり少年の技量が凄まじいのだというのを感じさせられる。

「はっ……っ♥ あ……うっ♥ くふううっ♥♥」

【乳首で喘いでるとこ悪いけど……そろそろ本気でいくよ～♪】

「ひっ♥ やめっ♥ あああっ♥♥」

(ほ、本気……♥ これ以上凄くなるとでも……っ♥♥)

本気宣言に戦慄する。自分の中身が変えられてしまうような予感に恐怖するが、どれだけ頑張っても腕力は蘇らない。無力な身体を揺すり、何とか止めてくれないか懇願する。

「ダメ♥ ダメよっ♥ 乳首っ♥ 弱くない、からっ♥」

【そっかあ。乳首は性感帯じゃないか～……】

「はっ……はあ……♥ そ、そうよ……勘違い、しないで……っ♥」

(手が止まった……♥ 諦めて、くれるのね……♥♥♥)

【ならボクが開発してあげるねっ！】

くりっ♥ ギゅりいっ♥♥

「なっ♥♥ ああっひひひひひっ♥♥」

(不意打ち♥♥ ダメええ……っ♥♥)

気が緩んだ隙を突いての抓り上げ。乳端から身体全体にかけて一気に媚熱が奔り抜け、堪らず大声を上げて悶絶する。

「やめっ♥♥ それっ……あああああ♥♥」

【気持ち良い？ ねえどうなのマルティナさん、気持ち良いんでしょ？】

「そんなことっ♥ こんなのが♥ 気持ち良いなんてことっ♥♥」

くりくりくりくりっ♥ びいんっ♥

「気持ち良くなんて♥♥ 気持ちっ♥♥ 良くうううっ♥♥」

(気持ち……良すぎる……っ♥♥)

乳首がこれ以上ないほど熱くさせられ……内心で認めてしまう。

少年の手、胸責めによる、抗えないほどの快楽を。

(もうダメ♥♥ これ以上されたら♥♥)

昂ぶった官能が追い詰められる。それを見透かしたように少年の指が動きを加速させる。

【そろそろイキそうなんでしょ？ いいよ、イカせてあげる！】

「っはあっ♥♥ ちがっ……ああっ♥♥ い、イカないからあっ♥♥」

胸と乳首に与えられる快感で、マルティナの身体は絶頂を迎えようとしていた。それすら見抜いた少年が一気に責め立てる。

【そおら、いけいけいけいけっ♪】

びんっ♥ びんっ♥ ギゅううっ♥

「ふっ♥♥ あ♥♥ やっ♥♥ あはあっ♥♥ イカないっ♥♥ 誰がっ♥♥ イッたりなんかっ♥♥ あ♥♥」

(こんな子なんか♥♥ ぱふぱふ小僧なんか♥♥ イカされるのだけはダメ……♥♥ でも……もうっ♥♥)

「あ♥♥ あ♥♥ あ♥♥ あ……っ♥♥」

【そらっトドメえっ！】

くりくりくりくりっ♥ びいんっ♥♥

「ダメええっ♥♥♥ ……っっはあああああああああっ♥♥♥」

両の乳首を激しく扱かれ、最後に思い切り弾かれる。感度が最大に高まった性感帯が、執拗な責めに耐え切れるはずもなく……マルティナは絶頂感を隠すことすらできず、首を反らせて牝の悲鳴を上げるのだった。

【あ～あ……ぱふぱふだけでイッちやった♪】

「あ……♥♥♥ ああ……っ♥♥♥」

(そんな……♥♥♥ こんな子に♥♥♥ 胸だけで……なんて……っ♥♥♥)

胸だけで絶頂させられたというのもあるが、相手が自分より小さな少年というのもまた屈辱であった。しかしその屈辱さえ官能に沁み付きだしており、屈辱の中でも余韻に眼を細めて恍惚を表してしまう。

【ねえマルティナさん？】

「っ♥♥♥」

少年が服を脱ぎ、ペニス……体格や顔つきからは想像もできない、巨大で凶悪な怒張を見せた。何をするのか、容易に想像できる。怖気がして一瞬凍り付く。早く脱さなければならないのに、快樂の縄に縛られてまともに動くことなどできない。

【今、胸だけでイカされるなんて屈辱！ とか思ったんじゃない？ だからさ……】

「まさか……♥」

【次はオマンコでもイカせてあげるよ！】

最初に見かけた時の純粹無垢な少年と同一人物とは思えぬ黒い笑みと共に、小さな身体が跳び付いてきた。押し倒され、一回り劣る体格に覆い被さられる。

「嫌っ♥ それだけは♥ あっ♥♥♥」

【おっぱいだけでこんなに感じてるってことは、オマンコも使ったらもっと気持ち良くなれるよ？ もっとスゴいの味わいたいよねえ？】

強引に行為に及ぶつもりなのだろうが、厭らしい性格ゆえかわざわざ確認をとってくる。……残念なことに、胸中では否定できない。だが肯定もできるはずがない。息を荒げながら説得を続けるも、少年は聞く耳持たずマルティナの股間……秘部を包むスパッツに手を伸ばす。

「落ち着いて♥ 気持ち良かったのは……認めるから♥ だから、あっ……」

【やっぱり、もう濡れ濡れで準備万端じゃん。これ合意ってことでいいよね？ こんなの見せられたらさ……】

言う間にもスパッツの股間部が引き裂かれる。やはり強引に挿入する気なのだ。愛撫絶頂により、しとどに濡れた牝秘部。そこに肉棒の先端が宛がわれ……

【もう我慢できないって！】

「待ちなさい♥ ぱふぱふだけって約束……♥」

ずぶっ♥♥

「くああ♥♥♥」

(そんな……♥♥♥ 本当に……挿れられ……♥♥♥)

恐れていたことが現実となる。童顔に似あわぬ太くて長い勃起。それを強引に根本まで咥えさせられ、更に下

半身が牝として反応してしまっている。

ぱふぱふだけのはずが、なぜこんなことになっているのか……現実逃避の猶予すら、少年と自身の肉体は与えてくれず、絶え間ない快樂に苛まされ続ける。

【流石マルティナさん、こっちのお肉もハリと柔らかさが最高だよ♪】

「な、なんてことを……っ♥♥ ぱふぱふだけって、言ったはずよ……♥♥ この、卑怯者、おっ♥♥」

【やだなあ……ぱふぱふしてもらてるじゃん、オマンコで！】

ぱんっぱんっぱんっぱんっ♥♥

「あ♥♥ ああっ♥♥ ダメ♥♥ っは……♥♥」

【出すよ！ このまま、マルティナさんの子宮に精液ビュルビュル出すよっ！】

「あ……♥♥ そんな……♥♥ ダメ……♥♥」

【いいよね、合意したんだからっ！】

ずごりゅうっ♥♥

「ああああっ♥♥♥ ダメ♥♥♥ 今はっ♥♥♥ 今だけはああっ♥♥♥」

【そらっ孕めっ！ 種漬けされてイッちゃえっ！】

体験版はここまでです。続きは製品版で！